

「凡事徹底」

～当たり前の事を当たり前（一所懸命）に実践する

沖縄県立首里高等学校

校長 田名 裕治

令和8年4月1日付けで沖縄県立首里高等学校の第34代校長として着任した田名裕治と申します。どうぞよろしくお願い致します。進路の手引き発刊にあたり、長い教職の現場で私自身が実践してきた考え方と先人の経験知と成功例から首里高生の皆さんに「進路」についての心構えの一端を申し述べたいと思います。

1. 「凡事徹底」の精神で日々の学びに精励すること

学びを進めていくうえで生徒諸君に求めてきたことは、「1日1日の各教科の授業を本当の意味で理解」して欲しいという事でした。簡単にわかった気にならないで、その教科・科目そして授業で教授される内容の本質に迫る努力を積み重ねる姿勢が大事だと説いてきました。その姿勢が学習内容の本理解につながる近道でもあります。首里高生の皆さん、自分自身の「進路」を実現させる為には、学習内容の理解が土台であることは君達も納得するでしょう。納得するのであれば、その事を当たり前に実践するのです。一所懸命に凡事を徹底するのです。首里高生一人ひとりがその精神で奮闘すれば、自ずと自分自身の「進路」実現に繋がっていくことでしょう。その実践者が自身の進路実現を勝ち取っていきました。君達の奮闘に期待をしています。

2. 先人の積み重ねた発見に基づいて新しい発見をすること

アイザック・ニュートンが同じ科学者であるロバート・フックへ当てた手紙の中で、「私がかたを見渡せたのだとしたら、それはひとえに巨人の肩の上に乗っていたからです。(If I have seen further it is by standing on the shoulders of Giants)」と書いています。

現代の解釈では「先人の積み重ねた発見（成果）に基づいて、新しい発見を行う事」とされています。新たな成果は、過去の成果や知識の上で生まれるという考え方とも言えます。この「巨人の肩に乗る」ですが、もともとは「巨人の肩の上に乗る小人」または「巨人の肩の上に乗る矮人（わいじん）」という言い回しもされています。西洋のメタファーで、巨人は「先人の積み重ねた発見（成果・知識）」であり、矮人は「その上で発見された新たな事実」と置き換えて考える事ができます。

首里高生の皆さんには、一旦立ち止まって思考をフル回転させて欲しい。ニュートンは、17世紀から18世紀にかけて活躍したイギリスの科学者です。物理学、数学、天文学など、多岐にわたる分野で目覚ましい功績を残し、科学史に名を刻んでいます。万有引力の法則や運動の法則を発見し、近代物理学の基礎を築いた事はあまりにも有名です。物事に関する知識や技能の習得、そして物事の本質に迫ろうと努力に努力を重ねたはずです。知識・思考力等を徹底して学び、物事の本質に一步でも迫りたいとの探究心があったからこそ諸々の業績を打ち立てたのです。

しかし、ニュートンは、謙虚さも忘れない。自身の業績は、先人の積み重ねた発見（成果・知識）」の「その上で発見された新たな事実」だと敬意を表する。学びに対峙し精励する姿勢（凡事徹底の精神）と「知」に対する謙虚で敬意に満ちた心構えこそが、首里高生の取るべき「進路」実現のための方策だと私は考えています。

首里高生諸君、「学び」の凡事を一所懸命に徹底し、自身の「進路」を確立せよ！